



大包圍網25時

小林久三

文藝春秋

著者略歴

昭和10年茨城県生れ。東北大学文学部卒業。松竹映画に入り、助監督をへて現在プロデューサーとして活躍中。昭和47年、「腐蝕色彩」で第3回『サンデー毎日』新人賞（推理部門）を、昭和49年には『暗黒告知』で第20回江戸川乱歩賞を受賞した。主著は受賞作のほかに『黒衣の映画祭』『裂けた箱舟』『殺人試写室』『錆びた炎』などがある。

大包囲網25時

一九七七年十月十五日 第一刷

定価 八九〇円

著者 小林久三

発行者 榎原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三郵便番号一〇二

電話東京（〇三）二六五—一二一一

印刷 共同印刷 製本 加藤製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えます

大包圍網
25時

パトカーのサイレンが、寺脇哲也の耳もとをかすめ過ぎた。神経をかき立てるように、断続的に響くその音が、車のハンドルをにぎる彼を、ふっと不安な気分にした。

いつもは、無関心にきき逃している音である。街の騒音と変わりはない。車の排気音や街頭アナウンス、通行人の話し声、上空を通過するジェット機の噴射音など、日常耳にする音と同じものだった。

パトカーのサイレンをきいたからといって、べつに神経を尖らすこともない。サイレンの音をきいたとき、

「街のどこかで事件が起こったな」

そんな思念が、ちらと意識の片隅を流れる。

ただそれだけのことだった。事件の内容を考えることもない。人口三十万をこえる、東京郊外のこの街のことだ。街の北端部には、米軍の兵站基地もある。事故や傷害事件など、新聞をにぎわすような事件が、日に一件や二件起こったとしても、すこしも不自然ではない。

それらの事件は、寺脇にとって、まるで他人事だった。別の世界の出来事のようにおもえる。

彼が現に住んでいるこの津川市で起こった事件であっても、どこか遠い異次元の世界の出来事のようにおもえるのだ。つまり自分の身辺には、そのような事件は、いっさい、起こらない、いや起こるはずがないと信じている。市郊外の南三田団地の一面に妻の京子と住む、平凡な一サラリーマンの自分に、新聞種になるような事件が起こるわけがないではないか。平和で確固とした家庭。京子とのあいだに、この冬、子どもが生まれたばかりだ。丸々と太った男の子だった。自分の一字をとって、哲夫と名づけた。今日の三月二十八日で、生後三カ月になる。

はじめての子どもなので、京子は育児に神経質になっている。そのせいか、乳の出がよくない。大半はミルクで育てている。

そのミルクが切れそうになった。

ミルクを買い足すために、京子と街に出た。夫婦二人で、津川銀座に出るのは、ほんとうに久しぶりのことだった。三度目の結婚記念日に津川銀座のレストランで食事したとき以来だから、半年近くになるだろうか。

京子は、市立病院で出産した。一般に、女は実家に帰って出産するものだが、彼女には帰るべき郷里がなかった。ひとりで哲夫を生み、退院後、哲夫の世話に明け暮れた。夫婦二人きりになる時間はまったくなかった。

その意味で、今日の土曜日、京子を車に乗せて街に出たとき、寺脇は一種の解放感を味わった。哲夫が可愛くないというのではない。可愛くてならないのだが、どこかこれまでの妻との二人きりの生活に、突然、侵入してきた異分子という感じは免れがたい。それに、妻の関心が、すべて哲夫にそがれているようにみえるのも、どこか面白くない。

だから、今朝ミルクが切れかかっていることに気づいた京子が、

「悪いけど、団地のスーパーでミルクを買ってきてくれない？」

と、寺脇にいったとき、彼は強引に妻を車に誘って、繁華街に出てきたのだった。

赤ん坊は、一日の大半を眠っている。ことに午前中一杯は眠っている。腹が減ったり、おむつが汚れている場合を除いて、ベビー・ベッドの上で昏々と眠っている。目を覚ましても、ほとんど身動きしない。3DKの一室の扉はきちんと締めている。津川銀座と団地を往復する小一時間の間、なんの危険もないはずだった。

そんな彼の説得に負けて、京子は助手席に坐ったのだが、赤ん坊の世話から解放されて、彼女もどこか浮き浮きしている様子だった。

ハンドルを握りながら、寺脇は、

「買物がすんだら、レストランで昼食を食べていかないか」

と、京子にいった。

「駄目よ。食事をしたら、二時間はたつぷりかかるわ」

「哲夫なら心配ないよ。だれもないほうがいいが、かえって熟睡できるんじゃないか」

「でも……」

「過保護は禁物だ。放っておくぐらいのほうが、強い子になるそうだ」

「そうね」

京子は迷ったように返事をした。最初の返事よりも、否定の意思が薄れて軟化している。

「いいね」

寺脇は、妻の迷いを押え込むようにいって、片手で彼女の手を握った。

「……………」

答えずに京子は、彼の手を握り返した。

「そうしよう」

彼がそう念を押したとき、パトカーのサイレンを耳にしたのだった。

寺脇は妻から手を離すと、両手でハンドルを握り、すれちがったパトカーの行方を一瞬、目で追った。

パトカーの車体は、あつという間に視野から消えた。かなりのスピードで走っている様子だった。

へなにかあつたのかな」

寺脇は頭のなかで、走り去ったパトカーの行方を考えてみた。彼にとって、めずらしいことだった。街のどこかで、殺人事件でも起こったのか。

耳の奥に、いま耳にしたサイレンの音が、エコーがかかったように増幅ぞうぶくされて響いている。気のせいか、妙に不気味な感じのする残響だった。

団地の五階の一室で眠っている哲夫の顔が浮かんた。

「冗談じゃない！」

寺脇は頭をふると、京子の横顔を盗見した。彼女は、サイレンの音を気にしている様子はなかった。フロントガラスに映る街の情景を、まるでめずらしいものでもみるように眺めている。団地の一室で育児に追われているだけに、何カ月ぶりに接する繁華街の風景が、新鮮に映るのだろう。

「へすこし太ったな」

と、彼はおもった。出産後、女は体に肉がつくというが、妻も例外ではないようだ。かつては

瘦せぎすで、やや尖った感じの顔だったが、頬から顎にかけての線に丸味が出てきたようである。首筋から肩の線も、ふっくらとして柔らかな曲線を描くようになっていた。

寺脇は頭の奥のほの暗い部分に、京子の白い裸の姿をおもひ描いた。

視線に気づいて、京子は寺脇のほうを見返し、意味もなく微笑んでみせた。どこかもの憂げな微笑。それが、知り合った頃からの彼女の癖だった。

おしゃべりなタイプではない。女にしては、ひどく口数が少なかった。言葉で表現するかわりに、唇の端にももの憂げな笑みを溜める。それが、愛情や信頼感の表示だった。それに気づいたとき、彼は京子と結婚した。

彼女の無言の意思表示に満足して、寺脇はアクセルを踏むと、スピードをあげた。

車は青葉通りを抜けた。

青葉通りを抜け、交差点を渡り切って右折したところに、津川銀座座があった。津川銀座通りのほぼ中央に、太平洋デパートがある。そこでミルクを三鐘ほど買ったあと、デパート裏のレストランに立ちよるつもりだった。その間、車はデパートの地下駐車場に置いておけばいい。

交差点にきた。

信号は赤だった。

車をとめ、寺脇は煙草をくわえた。

そのとき、ふたたびパトカーのサイレンがきこえてきた。こんどは一台ではなかった。複数、それも三、四台の車が、いつせいにサイレンを鳴らしている。

交差点の向うに、パトカーの姿が現われた。パトカーは信号を無視して、交差点を突っ切り、寺脇がいまきた青葉通りを疾走していった。そのパトカーの姿が消えるともまもなく、三台の後続

車が出現し、同じ方向に走り去っていった。

サイレンの音は、べつな方角からもきこえてくるようだった。風に乗って四方八方から、潮騒のように響いてくる。間のびした感じにきこえるサイレンの音も、このように重なり合い、ビル街に反響し、共鳴してくると、ひどく神経をかき乱す、威圧的な音にきこえる。

「事件だな」

寺脇は、独り言のように呟いた。

「なにかあったのね」

「うむ」

「どの辺かしら」

「青葉通りあたりだな」

「でも、いま通ってきたかぎりじゃ、事件があったようにみえなかったわ」

「気づかなかったのかな」

うなずいて、寺脇はライターをはじいた。火がつかなかった。ガスが切れているらしい。

不吉な予感が胸を走った。

ライターのガスが切れたとき、これまでろくなことは起こらなかった。タツチの差で電車に乗り遅れて遅刻したとか、書類のほんのささいなミスを課長に発見されて叱責されたとか、取るにたらぬアクシデントに過ぎなかったが。

2

デパートを出て、レストランに入った。

「海賊船」という、風変わりな名前の店だった。

名前の由来は、経営者が帆船の模型の蒐集家であることからきているらしい。壁のぐるりに、蒐集した帆船の模型のコレクションを並べているが、そのなかでもっとも立派なのは海賊船だった。全長一メートルもある精巧なつくりのもので、経営者がヨーロッパ旅行中に、ヴァイキングの老家だったオスロで買いたとめてきたという代物だった。

フランス料理が売物で、とくに葡萄酒はよく吟味されている。

寺脇と京子は、窓際に席をとった。

ハンバーグを注文した。まだ午前十一時半である。昼食には早い時間で、それほど食欲はない。部屋にのこしてきた赤ん坊のことが、なんとなく気になる。食事を楽しむことよりも、夫婦二人きりの時間をもつことのほうが目的であった。哲夫がまだ生まれない頃、週末には、よく二人でこの店に食事にくたものだ。

食事が運ばれてくるのを待つ間、京子はしきりに時間を気にした。

「遅いわね」

と、京子は何度も同じ言葉を口にした。

そのたびに、寺脇は、やや鼻白んで、

「心配することはない。哲夫はまだぐっすり眠っているさ」

と、いった。

「そうね」

京子はうなずいて、窓の外から通りのほうを眺めた。それは相槌というよりも、どこか自分にいいきかせているような語調だった。

へ子どもを生むと女は変わるな」

コップの水を飲みながら、寺脇は彼女に観察の目を投げた。彼女はどことなく落着かない様子だった。気分を落着けようとして、通りを眺めているのだろうが、彼女の頭のなかは、哲夫のことで一杯なのだろう。哲夫以外のことが入りこむ余地はないのかもしれない。時間がたつにつれて、ひとりのこしてきた哲夫のことが気になり、哲夫との間に生じた心理的、物理的な隔絶感が彼女の神経を苛だたせるのだろう。

近くの席に、四、五人の男たちが坐った。いずれもサラリーマン風の男たちだった。土曜日だが、彼らは会社に出勤したのだろう。寺脇が勤める化学会社は、週休二日制だった。

「銀行強盗があつたらしいな」

「襲われたのは、どの銀行だ」

「神奈川銀行らしい」

「青葉通りの」

「ああ。被害額は五千万円を越すという話だ」

「強盗はひとりか」

「三、四人という噂だ」

彼らが声高にかわす会話が、寺脇の耳に入った。さっきの物々しいパトカーのサイレンは、銀行強盗の発生によるものだったのか。

事件が発生してから、それほど時間がたっているとおもえない、車で団地を出たあとに起こったのだろう。

おそらく、今頃、市内全域に非常線が張られているにちがいない。

「銀行強盗か」

と、寺脇は低く呟いた。

「え？」

京子が驚いたように彼をみた。

「神奈川銀行津川支店が襲われたらしい」

「そうなの」

「襲撃したのは三、四人組だそうだ」

「三、四人？」

きき返して、京子は眉をひそめた。

「荒っぽい事件だな」

寺脇はちいさく笑って、おや、とおもった。近くの席の男たちの会話が、彼女の耳に届かなかったのだろうか。

そんなはずはありえなかった。京子の耳にも、ちゃんときこえていたにちがいない。

にもかかわらず、京子は、

「え？」

と、初めてきいたように驚いてみせた。目のうらに、そのときの彼女の表情が、淡い残像としてのこっている。どこがそうなのだとはい、正確に指摘できない。だが、見方によっては妙に演技じみた、不自然なところが、彼女の表情にはあったようにおもえる。

寺脇は一瞬、かすかな疑惑にとらわれたが、すぐに打ち消した。

「へおもしろいところだ」

と、彼は思った。銀行を襲撃した三、四人組がどんな連中か知らない。まるで知らないが、平凡な主婦に過ぎない京子が、そんな連中と関係があるはずがないではないか。

寺脇は苦笑して、煙草をくわえた。

無意識にライターを取り出し、ガスが切れていたことに気づいた。彼は軽く舌打ちすると、灰皿のうえの店のマッチを手にした。

マッチをすり、煙草の末端を近づけた。

そのとき、彼は自分にそそがれている視線に気づき、そっと顔をあげた。

視線の主は、京子だった。

気のせいか、彼女の目は、ひどく乾いていた。無機的な、冷たい色をしているようにみえる。

「……………!」

寺脇は煙草の煙の幕の向うの京子の顔を改めてみつめた。

京子はあわてて視線をそらした。

へどうしたんだ？」

そう声をかけようとしたとき、食事が運ばれてきた。

食事をしている間、二人とも一言も口をきかなかった。京子は黙々とナイフとフォークを動かしている。

不自然な沈黙が、二人の間に落ちた。

寺脇は時折り、彼女に視線を送り、しゃべりかけようとしたが、言語機能が不意に停止したよう
うで、うまい言葉がみつからなかった。

かりにみつかったとしても、彼女との間に、透明な壁ができて、こちらが発する言葉は、その

壁にはね返されてしまいそうな、そんな錯覚さえ覚えた。硬い表情で、食事をとる彼女の表情には、こちらから言葉をかけられることを断乎拒むといった、頑^{かたくな}な拒絶の色が滲み出ているようにみてとれた。

へどういふことなのだ、これは」

寺脇はハンバーグの切れ端を口のなかに放り込みながら、自分に問いかけてみた。

おもし当ることはひとつもなかった。

だが、確かなことが、ひとつだけあった。神奈川銀行津川支店を襲った銀行強盗の話を耳にしたとたん、京子の態度がにわかに変わったこと。

「妻は、銀行強盗の事件を、あらかじめ知っていたのだろうか」

得体の知れぬ不安が、霧のように、彼の胸の底に湧いた。

まさか、と彼はおもわず口に出していった。

京子が無言のまま、彼をみた。答めるような視線だった。そのような妻の目に接するのは、初めてのことだった。

不安の霧は、胸の底から、しだいに揺れながら立ちのぼり、胸いっぱいひろがっていった。料理の味はまるでなかった。無味無臭の、柔らかいゴムでも噛んでいるような感じだった。

食事を終った。

「コーヒーを飲むか」

寺脇は、京子にいった。

京子は黙ってうなずいた。

二人分のコーヒーを注文した。

十二時が近づくにつれて、店内はたて混んできた。周囲を占めた客たちは、一樣に、銀行強盜の噂を話し合っている。

銀行を襲撃したのは、どうやら四人組のようだった。コーラびんに細工した火炎びんを、一階カウンター付近に投げつけ、五千万円を強奪して逃走したらしい。彼らはテレビかラジオの速報で、事件の発生を知ったのだろう。自分たちがつとめるオフィスの近くで起こった事件が、彼らの好奇心をかき立てているようだった。自分が知っている俳優が出演したテレビの銀行襲撃ドラマでもみたような調子で、口々に感想を述べ合っている。彼らの関心は、とくに奪取した金額と、逃走した四人組の行方に集中していた。

「五千万円としたら、一人の分け前は一千二百五十万円か」

「意外に少ないな」

「馬鹿いえ。一千万を超す現金には魅力があるぜ」

「逃走した四人組は、どこに逃げたのかしら」

「市内に潜伏しているのじゃないか」

「市内にまだいるの？」

「案外、この店にいるかもしれないぞ」

「犯人のひとりはお前じゃないのか」

「かもしれない。ホールド・アップ！今日の昼飯代、君がおごれ！」

笑い声。

コーヒーをすすりながら、寺脇は、無責任な彼らの会話を耳を傾けていた。彼らにとって、この街に起こった銀行強盜事件は、食欲を増すための、一種の食前酒のようなものに過ぎない。昼